

7 雨 量 総 量

年	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
M	25	15.3	99.7	96.4	93.9	166.8	255.3	226.6	42.2	304.5	207.2	115.1	52
	35	28.8	64	108.6	100.1	301.0	162.2	181.1	205.7	275.9	218.1	84.5	164.0
	45	36.1	111.4	115.8	125.6	83.8	102.4	279.3	195.8	636.5	529.8	52.5	92.5
T	10	40.6	64.6	83.0	203.1	131.3	427.7	335.5	168.8	499.3	49.3	23.5	58.1
	5	35.6	100.3	145.2	113.1	65.7	97.6	136.3	72.8	77.2	133.5	141.3	40.9
	15	34	56.7	85.4	79.8	21.6	209.3	60.5	178.2	82.6	112.1	76.6	21.6
S	25	132.9	37.4	115.6	138.0	193.2	197.8	170.0	196.6	495.8	164.8	115.2	52.3
	35	35.4	12.4	74.0	216.5	127.1	238.5	163.2	383.8	107.7	117.8	70.1	16.4
	平均	42.9	62.4	97.2	128.6	139.4	202.2	194.7	182.4	294.5	194.9	92.2	53.9

8 雨 量 最 大 日 量

年	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
M	25	5.9	20.4	25.7	23.5	45.9	43.5	245.8	21.2	74.2	43.5	44.2	4.3
	35	11.0	2.6	39.1	16.5	80.0	51.8	67.6	90.8	72.8	95.6	30.7	63.6
	45	19.4	31.8	28.6	25.5	23.4	36.0	53.9	74.8	306.0	486.8	32.7	50.3
T	10	8.7	33.3	24.0	76.1	54.7	59.3	121.8	57.6	221.2	6.8	17.3	44.4
	5	10.6	42.0	64.8	19.9	23.9	40.2	67.0	19.4	24.3	48.9	42.9	22.9
	15	1.2	14.9	28.7	21.7	9.3	73.5	17.5	33.8	166.0	26.2	266.0	8.8
S	25	85.9	12.8	33.7	50.9	58.3	39.4	30.1	59.8	241.5	44.6	26.2	18.5
	35	30.4	7.2	23.4	123.1	48.8	59.8	44.9	86.3	24.4	43.1	19.7	6.9
	平均	(未調査)											

二 異常と災害

本地区では昔から地震・ききんによる災害の記録が残されていないので、風水害についてのみ述べる。

本町を訪れる他県人は、往時「藍師」と呼ばれた旧藍作地主の大きな家屋敷に驚異の限をみはらし。何も本町だけでなく、本町を含む中島地区を初め、吉野川沿岸一帯どこでも見られる家構えである。その構造の特長の詳細は省くが、豪農地主でなくとも中流以上の自作農家なら、どこも一〜二米の地盤の上に家が建てられている。その理由はいうまでもなく洪水時の浸水防止の嵩あげである。

地盤が低ければ、大洪水時には軒下までも浸水するし、藁家ならそのままぶくぶくと押し流されてしまう。

無堤あるいは低堤時代の往時は、破堤する箇所は大体常に定まっていた様である。河川は蛇行曲流する慣性があるので、水勢が激突して曲流する角に当る箇所が抵抗が弱い。本流では、鑪場から小塚の間、名田から新居須の間が多く、北川では溢水もあるが、宮川内谷川の合流する東中富北部であった。いま直道から板野町境に至る県道の石畳は、洪水時に道路が流失しないための予防強化措置の名残である。

その当時、県内で連日の大雨の時は、吉野川は増水し時には洪水となるが、それよりも気味の悪いのがいわゆる「土佐水」であった。吉野川の水源は遠く高知県瓶ヶ森山に発しているため、徳島が好天気でも高知の山系が大雨であれば、その厄にあうのは下流の徳島である。天気予報の完備していない往時、晴天のへきれきの如く土佐水の警報におびえて堤防を監視し、かつ強化し、座上浸水を恐れて、畳をあげ万端の避難準備をしたものであった。往古から大正期までの洪水記録を「吉野川」から採録すると次の通りである。(年度のみを示す。)

- 仁和二 承德二 天正七・八・一〇 享保 七・一一・一三・一四・一六・一七
- 元文三 宝曆六 明和二 安永一・三・五 天明二・七
- 寛政三・四 文化一三 文政六・一一 天保七・八・一四 弘化四
- 嘉永二・六連年 安政四 万延一 文久三 慶応二・三
- 明治三・六・一七・一八・二五 大正元、九
- 三一・三二・三七・四四

枚挙にいとまがない。今旧組頭庄屋山田家に残された文書および絵図を見ると、(1)天明八年「東中富北吉野川崩口」によると左図の如くで、北川では北宮方面で一五〇間(二七三米)敷地方面で一八〇間(二四八米)が破損し

ている。この図によると北川は下庄八幡社の南方を曲流し、下庄新田と西中富新田との間に小流があり、旧吉野川曲流間を連絡する流路があり、現在と大分ちがっている。

(2)慶応三年の大水で、東中富大川筋で五〇〇間(九〇〇米)破堤している。(3)この前年の慶応二年八月五日の寅年の大水でも東中富で破堤しているが、これが修理のため各村々から人夫が調達せられた文書が残っている。

慶応三卯年三月

東中富村普請処に罷越相働候難済人の名蔵取調申上帳

- 西貞方村 富蔵 四十六 すま 二十一 ひき 六十九
- 紋蔵 四十四 妻 三十三 以下略 百七人
- 同 竹瀬村 多三郎 四十二 豊次 三十八 以下略
- 合 十五人

右者東中富村堤御普請に付難済人其之内稼仕候者名蔵取調差上候処相違無御座候

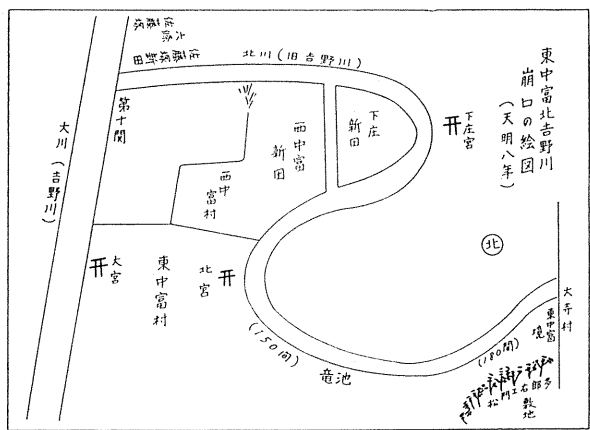
竹瀬村庄屋 木内兵右衛門

卯三月七日

明治の治世となっても大水の被害は変わりなく、ここに(4)明治十五年の出水被害の請願書がある。

出水ニ付疼所御見分之義ニ付請願

板野郡東中富村新川筋字鑪場傍示



一、根杭破損 長八十六間根圍ノ杭打捨疼
同郡同村吉野川筋字西傍示(直吉地先)

一、根杭破損堤腹崩レ 長四十三間堤腹崩レ 根杭破損共

右ハ当記別東中富村吉野川筋及新川筋ニテ本年八月六日洪水ニ疼、目下難捨置候所ニ付当月九日臨時村会開会
シ該費金之内五分通村中協議費ヲ以謀出可致ニ決議報告相成候ニ付至急御検査ノ上御修繕相成度村会決議ニヨ
リ私ヨリ請願仕候也

徳島県板野郡東中富外二村

戸長 山田多右衛門

明治十五年九月九日

徳島県令 酒井 明殿

この新川は第十新川(別宮新川)すなわち現在の吉野川で、吉野川は旧吉野川のことである。

大正十五年に吉野川の築堤ならびに第十樋門の竣工以来、さしもの大洪水もびたりとなくなり、本地区の住民は枕を高くして眠ることができ、家屋敷も嵩あげのための地盤もそう高くする必要はなくなった。しかしすでに構築以来三十有五年の歳月を経たので、老朽化しつつあり、かつ川床もあがったので漏水もあり、堤防内外の補強工事は年中どこかで行なわれている現状である。近時における吉野川堤防工事の内訳は別表の如くである。(建設省調) さらに昭和期に入ると、災害は、

昭和 三 吉野川大洪水 千害
九 九・二二 室戸台風 大干害
昭和 六 千害

昭和二〇・九・一七

吉野川大洪水

〃 二一・一二・二二

南海大地震

〃 二四・七・三一

豪雨で吉野川沿岸

水害

〃 二五・九・三

シエーン台風ノキ

シア台風

〃 二六・七・一

ケイト台風

〃 二六・一〇・一四

ルース台風

〃 二七・六・二三

〃 二九・九・一四

ダイナ台風

吉野川大洪水

〃 二八・九・二六

〃 三四・九・二六

宮川内谷川決壊

伊勢湾台風

1 災害復旧工事				
昭和 28	9.25	台風	29年度 延長 310m	10,000千円
昭和 30	9.30	台風	30年度 延長 125m	3,730千円
2 改修工事				
24年度着工		28年度完工		
築護	堤岸	5,000m } 2,000m }	62,500千円	
35年度護岸	100m	5,700千円		
36年度護岸	191m	11,300千円		
37年度護岸	193m	12,300千円		
38年度護岸	50m	4,000千円		
3 補修工事				
37年度護岸	48m	1,050千円		
38年度護岸	64m	1,600千円		

と、災害はとめどもなく続いている。昭和二十三年から同三十二年に至る本町内の災害の種別と状況調査は次表の如くである。

(1) 災害の種別、発生回数及び被害額
(単位 千円)

年次別	種別	回数	風害	水害	干害	その他	計
昭和32年	回数	2		2			4
	被害額	7,500		1,900			9,400
31年	回数						
	被害額						
30年	回数						
	被害額						
29年	回数	3		4			7
	被害額	9,200		17,000			26,200
28年	回数	2		2			4
	被害額	3,200		1,300			4,500
27年	回数			2			2
	被害額			15,500			15,500
26年	回数	2		2			4
	被害額	1,700		1,500			3,200
25年	回数	1		1			2
	被害額	3,700		4,500			8,200
24年	回数	1		1			2
	被害額	500		1,100			1,600
23年	回数	2		2			4
	被害額	3,400		2,100			5,500

年次別	種別	回数	風害	水害	干害	その他	計
昭和32年	回数	2					2
	被害額	10反					
31年	回数						
	被害額						
30年	回数						
	被害額						
29年	回数	2					2
	被害額	250反					
28年	回数	2					2
	被害額	120反					
27年	回数	2					2
	被害額	160反					
26年	回数	1					1
	被害額	110反					
25年	回数	1					1
	被害額	200反					
24年	回数	1					1
	被害額	150反					
23年	回数	2					2
	被害額	140反					

(2) 被害の状況

年次別	被害種別	人被害		建物被害		田被害	
		死者不明	負傷者	流失全壊	床上水浸半壊	流失埋没	冠水
昭和32年				1回		2回	
				2		60反	
31年				1回		1回	
				3		150反	
30年				1回		1回	
				2		500反	
29年		1回		2回	2回	3回	
		1		4	8	1,200反	
28年				1回	1回	2回	
				2	4	800反	
27年				1回	1回	2回	
				1	3	1,500反	
26年				1回	1回	2回	
				2	4	620反	
25年		1回		2回	2回	1回	
		1		6	19	550反	
24年						1回	
						650反	
23年						2回	
						1,400反	

(1) 1、河川表
三水
自明治十九年至大正七年

川名	被害区域	本堤延長	要欠止護岸延長	被害損亡高
右派別宮川	四八二二	一〇五三	左右三八三〇間	七二、七〇五
吉野川	一一〇六反	一二三三間		一九、八九一

(2) 幹流吉野川

地	名	延長	搭	載	量	船	脚
本村大字東中富村字権現ヨリ同村字直道ニ至リ猶又大字竹瀬村字岸ノ下ヨリ大字成瀬村字穂実ニ至ル	一、二二三一間	出水 一万二千貫	平水	渴水	出水 五尺	平水	渴水

五四

(3) 右枝流別宮川

地	名	延長	塔	載	量	船	脚
本村大字東中富村字大塚ヨリ同村鏑場ニ至リ猶又大字徳命村字新居須ヲ廻リ応神村大字西貞方村ニ至ル	一、〇五三	出水 一万二千貫	平水 二千八百貫	渴水 二千貫	出水 五尺	平水 三尺	渴水 貳尺五寸

吉野川筋ハ平水ニテモ船ノ通行スベキ水量無之満潮ヲ待テ漸ク通船スルヲ得ルナリ

(4) 吉野川幹流表

川名	流路	流域面積	水源	末流	航路長	航路区域
吉野川	一、二五一間	一、二〇六反	大字東中富村字権現	大字成瀬村字穂実	一、二二三一間	藍園村大字東中富村字権現ヨリ同村大字成瀬村字穂実ニ至ル

(5) 右枝流別宮川表

川名	流路	流域面積	水源	末流	航路長	航路区域
右派別宮川	一、〇五三	四、八二三	大字東中富村字大塚	大字徳命村字新居須	一、〇五三	藍園村大字東中富村字大塚ヨリ同村大字徳命村字新居須ニ至ル

備考

吉野川ハ兩岸共本村大字東中富村字権現ヨリ本村ニ入り東北流シテ左岸ハ板西村右岸ハ全村直道ニテ板西村ニ入り猶亦大字竹瀬村字岸ノ下ヨリ本村ニ入り東流シテ成瀬村字穂実ニテ板東村ニ入ル
別宮川ハ本村大字東中富村字大塚ヨリ本村ニ入り東流シテ同村字鏑場ニテ名東郡北井上村ニ入り猶亦本村大字徳命村字新居須ヨリ本村ニ入り同村ヨリ応神村ニ入ル

2、水害の記録

明治二十三年九月十一日

(種目)

米

(被害歩通)

百分ノ五

大豆

百分ノ五

浸水地所

米

十分ノ二

大豆

十分ノ二

九月十七日

粟

十分ノ四

芋

十分ノ三

浸水地所

十分ノ十五

五五

吉野川水害損亡高

水害年月日	作物損亡高	道路橋樑家 等被害高	計
十九年九月十二日	三、九六〇円	一一五円	四、〇七五円
貳拾年九月十五日	一、七五五	五八	一、八一三
廿一年九月十日	三、二八七	三八	三、三二五
廿二年八月十九日	二、二五三	二二二	二、四六五
廿三年九月十一日	四、二三五	二五八	四、四九三
廿四年九月十七日	三、五〇〇	二二〇	三、七二〇
廿四年九月十四日	一八、九九〇	九〇一	一九、八九一
計			

別害川水害損亡高

水害年月日	作物損亡高	道路橋樑家 等被害高	計
十九年九月十二日	一五、六七三円	三五五	一六、〇二八
廿一年九月十五日	六、九三〇	一五五	七、〇八五
廿一年九月十日	一一、二七二	二八三	一一、五五五
廿二年八月十九日	八、〇九一	二一一	八、三〇二
廿三年九月十一日	一六、六三二	六八五	一七、三一七
廿三年九月十七日	一一、八六〇	五五八	一二、四一八
廿四年九月十四日	七〇、四五八	二、二四七	七二、七〇五
計			

明治二十五年七月廿三日、廿四日

板野郡藍園村大字東中富村 一仮定県道破損 貳ヶ所 十八間 一同 半崩レ 三ヶ所 廿間

吉野川支流別宮川筋新居村字名田 一堤防決潰 一ヶ所 三十間 同腹崩レ 一ヶ所 十六間

一無損皆無見込田 反別 三町歩 但此見積代 三百拾五円

一無損皆無見込畑 反別 五百貳拾貳町貳反歩 但此見積金 三万七千五百九十八円四十銭

吉野川幹流及支流別宮川ヨリ大字奥野村徳命村東中富村本村成瀬村竹瀬村ト浸水セリ最モ大字徳命村破堤ノケ所東中富村無堤ノケ所ヨリ土砂ヲ押入荒地トナリ家屋ヲ倒シ道路橋樑ヲ荒シ悪水路ヲ埋メ畑ハ総テ無毛トナル然ルニ再ヒ播種セシニ好順氣ヲ得 即今ニテハ半ノ收穫ヲ得ル見込ナリ

二十七年九月十一日 兩日ノ暴風雨ノ為メ家屋ノ崩潰十一軒破損セシモノ五十三軒ニシテ同十一日午後四時比ヨリ吉野川及同支流無堤ノケ処ヨリ入水畑地ハ渾テ浸水シ同十一時比ニ到テ漸時水勢ヲ減セリ浸水ノ為メ立毛ニ五歩ノ損害ヲ生セシモ家屋ノ浸水ハ更ニナシ

二十八年九月八日 一損害ヲ来セシハ吉野川及同支流別宮川ノ兩川ナリ 一罹害ノ大字村ハ奥野村徳命村東中富村本村成瀬村竹瀬村ノ六ヶ村ナリ

一九月八日午前八時比ヨリ吉野川本支流ハ水嵩ヲ増シ同日午後一時比ヨリハ俄ニ増水シ同村支流無堤ノケ処ヨリ入水シ畑地総体ニ対シ六歩半通浸水シ同日午後五時ニ到テ引方トナリ翌九日午前ニ到テ全ク引落チタリ家屋浸水道路堤防ノ破壊等ナシ

二十九年八月十七日 午後五時比ヨリ南東暴風起リ時々大雨延テ翌十八日午前二時比ヨリ尚一層猛裂ナル強風雨トナリ正午十二時ニ至漸ク止ム同日午前八時ヨリ増水シ午後七時比ヨリ吉野川東支流無堤ノケ所ヨリ田浦へ浸入

シ終ニ一円ノ入水トナレリ翌十九日午後七時ニ至全ク引落チタリ

参考 吉野川本流平水ヨリ十一尺三寸ヲ増セリ

吉野川支流別宮口通平水ヨリ十七尺二寸ヲ増セリ

家屋 全潰 十軒 破損 三百五十軒

二十九年九月十二日 本月三日ヨリ連日之降雨ニシテ十一日午前七時ヨリ風向東ニシテ強風起リ尚午前十一時ヨ

リ猛裂ナル暴風雨トナリ午後七時ヨリ風向北ニ変シ同十一時ニ至西風トナリ稍々中風トナル翌十二日午前一時ニ至雨止ム 十一日午後四時ヨリ増水シ同十時ヨリ吉野川本支流無堤ノケ所ヨリ田圃へ浸入シ管内一円入水セ

リ延テ翌十二日午前四時三十分ヨリ爾後遂次復水ニ趣ク

参考 吉野川筋平水ヨリ壹丈二尺二寸ヲ増セリ 旧支流別宮口通平水ヨリ壹丈八尺ヲ増セリ

浸水反別 五百五拾六町五反歩 潰 家 拾三棟 破壊家 貳百貳拾四軒

作附立毛中被害ノ滅亡見込 夏秋粟 皆無 大豆 皆無 陸稻 三步通 里芋 三步通

三十年九月二十九日 一東中富村堤決潰 二十五間 ケ所二 一同所堤腹崩レ 八十五間 ケ所四

一徳命村堤決潰 四十九間 ケ所二 一田畑不殘浸水 一作物被害概略 三步通域 一荒地概略十

町歩 一浸水家屋不殘 一床上最高五尺余 一仮定県道破壊 概略徳命村 五拾間 一村道

破壊 百八十間 一作付立毛中被害滅亡見込 秋粟 皆無 大豆 四歩通 陸稻 三步通

田作米 三步通

三十年九月三十日ノ洪水ハ同月二十六日ヨリ連日之降雨尚同廿八九ノ兩日ハ一層降雨強勢ニシテ午後十一時ニ至全

ク止ム然ル処幹流吉野川本支流共同廿九日午前十一時ヨリ遂次増水午後九時本支流共無堤地ノケ所ヨリ田圃へ浸

入延テ翌三十日午前一時ニ至管内全村寸地ヲ余サス浸水シ同午前七時ニ至漸次減水ニ趣ク然ルニ全村七歩ハ床上

浸水其深キハ五尺ニ達シ殘ル三步通りハ僅々四戸ヲ除クノ外床下浸水シ大字本村成瀬村竹瀬村ノ如キハ既往三十

二年前寅年ノ大洪水ヨリ五六寸ノ高位ニ居レリ

建物 流失及崩潰 三軒 損失価格 九〇円 一軒ニ付三十円

破損及浸水 一、九三〇 一九、三〇〇 一軒ニ付 十〇

耕地 流亡 三五反 二、四五〇円 一反ニ付七十円 年荒荒 六五反 五二〇円 一反ニ付

八円 立毛ノ損耗 五、二三五反 二〇、九四〇円 一反ニ付 四円

雑種地 宅地 二反 四〇円 一反 二十円

堤防 切所 七四 一、四八〇円 一間ニ付二十円 缺所 八五 三五〇円 一間ニ付 四円

道路毀損 二二三〇 一、一五〇〇 一間ニ付 五〇

雑種流損 二七、三五〇円 藍 二二、五〇〇円 雑品 四、八五〇円 一戸平均五円

計 七万三千六百七十円

三十二年七月九日 一被害地 藍園村各大字全体六ヶ村 一、本流吉野川同支流別宮川、尤モ別宮川水害甚ダシ

一被害ノ尤モ甚ダシキハ大字徳命村ニシテ別宮川ニ添ヒタル堤防僅ニ貳拾間ヲ存セルノミ貳百五間悉ク破堤シ加

フルニ水上名東郡新居村大字北新居村字名田ノ下堤防三ヶ所大破壊ニ及ビ尚一勢ノ水力ヲ加ヘ砂入地數十町ニ

及ブ、然シテ全体耕作ノ主タル葉藍採取ノ始ニシテ既ニ刈取り乾燥中ノモノハ皆腐敗ニ属シ未ダ地上ニアルモ

ノハ數日洪水停滞ノ為メ全体ノ六歩ヲ損傷シ四歩以内ノ收穫ヲ避ルモ是レ皆泥土附着シ品位劣等ニシテ價格上

比較セバ全額ノ凡二歩ナラン 又大豆ハ目下植付中ニシテ既ニ植付アルモノハ凡テ枯死シ更ニ植直サルヲ得

ズ然ルニ種子大豆欠乏シ之レガ種子ヲ求ルニ途ナカラン 田地ニ於テハ凡テ一周間以上洪水停滞シ聽テ植稲枯死スベシ 各戸ノ損失概略衣類食料寝具等浸水セシメ途ニ迷フモノ数多ニシテ口糊ニ迫ルモノ凡百五十戸 向後耕作ノ途ヲ失フモノ全村ノ半凡ソ四百五十戸ニシテ残ル三百有余ノ戸数ハ継続ノ途アルモノト思考ス

一人蓄死傷 死亡男一人 一建物 流夫及崩潰 六軒 三〇〇円 一家屋破損及浸水 三戸三棟流失

一九二七棟破損浸水 五七、八一〇円 耕地 流亡 一町 一、二〇〇円 年季荒 二〇町 七、〇〇〇円

立毛ノ損耗 五一六町 一四四、四八〇円 一浸水反別 五二二町三反 雑種地 宅地 八十三町 森林山野地 二町 一堤防切所 三ヶ所 二〇五間 六、一五〇円 缺所一 二〇間

二〇円 一用悪水路破損 一ヶ所 五〇〇間 一道路毀損 五ヶ所 五〇間 五〇〇円

一橋梁 毀損 五ヶ所 二〇間 七五円 一雜種流損 二、五二七円 通計 二二〇、五六二円

本表ハ流域相混スルヲ次テ区分スルアタハス

收穫 皆無之部

種類	被害反別	損失数量	同上見込価格	敵	要
藍	一、二九一反	五八、〇九五貫	三八、七三〇円	藍陸稻夏粟ハ同一地内ニアルモノニシテ破堤ノ為メ押掘トナリ砂入トナリ或ハ洪水停滞長時間ノ為メ腐融ニ属セシ等ニヨリ皆無トナレリ	
陸稻	八五〇	一、〇二〇石	七、一四〇		
夏粟	四〇〇	八〇〇石	三六〇		
田稻	三〇	九〇石	七二〇	田稻ハ植付ノ遅クシテ低地ノ分ニシテ洪水ノ停滞長時間ノ為メ枯死皆無トナレリ	

藍ハ一反ニ付四十五貫一反ノ価格三十円 陸稻一反ニ付二石貳斗 石七円 粟一反ニ付二石 一石四円 五十木

田稻三石 一石八円 大豆一反ニ付二石三斗 石八円

收穫幾部被害ノ部

種類	被害反別	損失数量	同上見込価格	摘	要
藍	三、八七二反	一〇四、五四四貫	九二、九二八円	藍ハ六歩ヲ損傷セリ残ル四歩ハ是レ皆泥土附着シ品位ハ至極下等ニシテ價格ヲ比較セバ全体五分上ニ過ギズ 陸稻ハ予想通常ノ四歩減損大豆ハ発芽ニ際シ非常ノ害ヲ被リ総テ腐融ニ属シ目下再播種ニ着手中ナリシカ季節大ニ遅レシタメ予想三歩ノ減損以上同一地内	
陸稻	三五〇	三五石	一、一七六		
大豆	二、九八〇	一、一六二	九、二九六	田稻ハ移植ノ早クシテ高地ノ分ハ目下点ニ青芽発生ヲ視ルニ至レリ是ニ依テ予想五歩ノ減損	
田稻	三七	三七	四四〇		

三十二年八月十五日 は暴風雨ニ付同日午後三時比ヨリ吉野川出水同支流別宮川増水最モ甚シ大字徳命村ニ接スル名東郡新居村大字北新居村字名田堤防(本村ノ土木費負担ノケ所) 仮堰貳拾五間余破壊シ大字徳命村畑凡ソ三拾町歩大字奥野村畑凡ソ三十五町歩浸水大字本村成瀬村ニテ畑凡ソ貳拾町歩矢上川ヨリ浸水セリ大豆陸稻ハ多少被害ヲ免レス徳命村奥野村ニ於テ畑凡ソ貳拾町歩今尚洪水停滞セリ此ヶ所ノ作物大豆陸稻ハ或ハ皆無ナランモ難斗奥野村田作米ハ客月九日ノ被害残りノ分ニ対シ此度ノ暴風雨ハ洪水ニヨリ其被害ハ先ヅ平年ノ四分ノ一位ナラント予想セリ

三十二年八月二十八・九両日 暴風雨出水

吉野川本流水嵩壹丈壹尺 午前十一時

別宮川水嵩壹丈八尺 午前十一時

三十二年九月八日 一吉野川筋最高点 壹丈三尺 午後八時 一別宮川筋最高点 貳丈 午後八時
 明治三十二年 水害 損失価格通計 一四八、七九七 一洪水ハ七月九日 八月十五日 二十八日 九月九日
 一本村ハ吉野川幹流及同支流別宮川ヲ以テ南西北ノ三方面ヲ囲ミ幹支両流ヨリ一時ニ其害ヲ受ク故ニ幹支ノ被害
 区分シ得ズ 一罹害ハ大字奥野村徳命村東中富村本村成瀬村竹瀬村ノ六ケ村全体 一七月九
 日ハ未曾有ノ出水ニシテ大字徳命村堤防破壊二百五間缺所二十間又徳命村ニ接スル名東郡新居村字名田堤防凡
 三百間破壊セシニヨリ非常ノ害ヲ受ク浸水ノ家屋八百七十八戸座上浸水ハ百五十五戸ニシテ深キハ六尺以上ニ
 及ベリ作物ノ藍ハ將ニ採取セントスルニ際シ泥土附着セシ為メ価格平年ニ比シ四歩ヲ減損セリ又葉及稻等ノ砂
 石ニ埋没セシモノ凡四十五町大豆ハ播種後日浅キヲ以テ不殘腐蝕ニ属セリ夏粟野菜等ノ類ハ凡テ皆無トナレリ
 八月十五日出水ハ大字六ケ村各浸水セザルハナシ浸水畑總計百六十五町ニシテ徳命村ニ接スル名東郡新居村字
 名田仮留堤凡百間破壊セリ為メニ徳命村ノ害甚ダシ 同月二十八日ハ本村大字六ケ村ハ宅地ノ幾部分
 ヲ除ク外凡テ浸水家屋ハ座下浸水五十戸作物ノ大豆陸稻ハ前兩度ノ被害後幸ニ漸々生育ニ向ヒツ、アリシカ殆
 ト枯涸セントスルニ到レリ 九月八日ハ又宅地ノ幾部分ヲ除外大字六ケ村凡テ浸水徳命村仮留埋三十
 間破壊セリ 秋粟大豆陸稻等ノ如キハ殆ド皆無ノ姿ヲ呈セリ蘿蔔ハ再三蒔直シヨナシ生育ノ時期ヲ失
 セ為メニ原年ノ五分ノ三分五厘ヲ減ス芋ハ再三出水ノ為メ半以上腐蝕ニ属シ原年ノ五分ノ三ヲ減損セリ以上ノ
 如クシテ水ノ滞留スル事通算長キハ五十日以上ニ及ベリ 一堤防切所缺所ハ県ノ直営工事ニ付損失価
 額取調ガタシ
 三十三年八月十九日暴風雨被害 一吉野川本流 十七尺五寸 一別宮川 十九尺五寸
 八月二十四・五日兩日水害

一床上浸水 住家五十戸 一浸水反別 耕地 五百拾九町 宅地 六十六町

三十三年九月廿八日 午後二時 本流 十二尺八寸 支流別宮川 十八尺五寸

三十五年八月十一日 本流 壹丈五寸 支流 貳丈貳尺

三十五年九月七・八日 水量最高点ハ本流壹丈三尺貳寸同支流貳丈七尺ニシテ地上ニ浸水ヲ始メタルハ八日午前
 十時四十分名東郡北井上村大字東黒田村字小塚及比本郡柴村大字西中富村字川南等無堤ノケ所ヲ浸水シ漸次応神
 村大字西真方村及本村大字東中富村字直道傍示ヨリ浸水シ全村充滿セリ同日午後八時ニ至テ引方トナリ翌九日午
 前十時ニ至リ高地ケ所ハ概ネ干落タリ

三十六年七月九日 一降雨ノ日時 七月七日午前二時 一霽雨ノ日時 七月九日午前七時

一起風ノ日時 七月八日午前一時 一収風ノ日時 七月八日午後十一時 一風ノ方向 東南

一出水ノ初期 七月八日午前八時 一最高水位 七月九日午後五時 吉野川 壹丈四尺 支流 十九尺五寸

一平水ニ復セシ日時 七月十四日午前八時 今回降雨ニ対シテハ強風ナシ至穩ナリ

三十八年六月廿九日 浸水反別 畑 四町歩 田 七町歩

三十八年八月十七日 吉野川本流 一丈五尺 同支流別宮川 二丈五寸

浸水反別(耕地五百十三町歩 宅地二十二町歩)

農作物 米 四割減ノ見込 作付反別百九十丁歩 大豆 五割減ノ見込 作付反別百八十五丁歩

秋 粟 七割減ノ見込 作付反別二十丁歩 二番葉藍 三割減ノ見込 採取残七十丁歩

四十年七月十九日 一降雨被害ハ藍作ニシテ恰モ藍粉成ニ際シ降雨打続キ為メニ充分葉藍ノ乾燥ナスアタハズ從
 テ品質善良ナラズ收穫上一割以上ヲ減損セリ且ツ降雨長カリシ為メ自然採取ニ多クノ日子ヲ要シ今尚採取中ノ

モノ多ク是等ハ時期ヲ失シ品質又善良ナラズ価格ノ下廉ハ免ガレザルナリ
 床上浸水 住家八百二十戸 非住家千五百戸 浸水反別 六百三町六反歩
 四十年九月八日 出水ノ初期九月七日午前八時 最高水位九月八日午前二時吉野川一丈三尺五寸支流別
 宮川貳丈壹尺、平水ニ復セシ日時九月十三日午後二時今回降雨ニ際シテ大ナル強風ナシト云ヘドモ風雨中ニ於テ
 洪水トナリ為メ堤防ノ破壊多ク浸水家屋ノ損害モ又多ナリ 農作物ノ被害ハ重ニ大豆ニシテ殆ド皆無
 ナリ次ニ米ニシテ粟ハ皆無ナリ

四十三年五月十一日 暴風雨ノ為メ被害本村全部ニシテ麦ノ作付反別ハ四百十九丁七反壹反歩ニ付貳斗ヲ減収セ
 リ桑植付反別ハ九十四丁七反ニシテ一反歩ニ付貳拾貫目ノ損失ナリ

四十三年九月七・八日 降雨ノ日時九月三日午後六時頃 出水ノ初期九月七日午後四時頃ヨリ浸水セリ 風ナシ
 耕作物ノ被害ノ重ナルモノハ米、大豆、小豆、粟ノ四種ナリ

四十四年七月二十二日 八月十五・六日
 四十四年九月二十二日・廿三日 出水ノ初期ハ九月二十二日午前三時頃最高水位ハ同日午後五時平水ニ復セシハ
 同廿三日午前九時水位高点ハ水量標ナキヲ以テ明瞭ナラズ堤防破壊ハ二十二日午後二時頃ナリ破壊ケ所ハ大字東

中富村字鑪場傍示ナリ
 備考 今回ノ水害ハ別宮川ノミノ關係ニシテ被害ノ最モ大ナルハ東中富村ニシテ本年八月十六日出水ノ為メ堤
 防破壊セシケ所へ仮留工事ヲ施シタルケ所再ビ破壊セシモノナリ 荒地ハ九丁五反歩内八丁一反歩ハ本年

八月十六日荒地トナリシモノノ再荒ニシテ今回新ニ荒地トナリシハ一丁四反歩ナリ
 大正元年九月二十二・二十三日 吉野川流域水害 別宮川堤防 決潰 二ヶ所 延長 一五二間

県管損失価格 三四、〇〇〇円 欠損 一ヶ所 延長 五〇間 五〇〇円
 計 三ヶ所 二〇二間 三四、五〇〇円

風 初期 九月二十二日午後十一時 後期 九月二十三日午前十時 方向 東北
 降雨 初期 〃 二十日午後十時 終期 〃 二十三日午前三時頃
 吉野川出水 初期 〃 二十二日午後十時頃 終期 〃 二十四日午後十一時 最高水位 二丈八尺位

住	所	氏	名	生	年	月	日	死	亡	年	月	日
徳命字前須西一五一の四		近藤	キク	慶応三、七、一〇	日	生	大正元年九月二十三日	午前十時				
奥野字前川一〇〇		岡本	敬太郎	明治三五、一〇、二七	生	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
富吉字穂美七〇の一		小原	タカ	文政二、一、三	生	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
富吉字穂美七〇の一		小原	徳太郎	慶応三、三、一	生	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
奥野字前川一四〇		田村	清	明治四〇、一、一	生	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
奥野字原五七		田村	類藏	嘉永一、一、二〇	生	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
奥野九		山田	リツ	明治二、二、一三	生	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
奥野九		山田	フジ	弘化二、一、二〇	生	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
笠木字中野七		西条	賢一	明治二九、一、一五	生	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

汎濫ノ広袤 東西 二十七丁二十五間 南北 三十三丁 面積 流域内 六百八十五丁八反
 被害町村名 藍園村大字奥野村 徳命村 東中富村 本村 成瀬村 竹瀬村
 人事 死亡 八人 負傷 二人 合計 一〇人 (九月二十三日九時〜十時の間死亡の届あり)

建物 住家 流失崩壊 二八棟 四、二〇〇円 其他ノ浸水 八一〇棟 二四、三〇〇円
 計 八三八棟 二八、五〇〇円 非住家 流失崩壊 三二棟 二、五六〇円
 其他ノ浸水 四一棟 六、六〇五円 計 四四三棟 九、一六五円
 合計 一、二八一棟 三七、六六五円
 (田)生毛ノ損失 米 一四〇・五石 三〇、九一〇円 流失、埋没 六一〇反 一〇九、八〇〇円 其ノ
 他ノ浸水 三一七、九反 計 三七八、九反 一〇九、八〇〇円
 (畑)米 八四町六反 一、〇一五石 一八、二七〇円
 大豆 一、五二〇石 一六、七二〇円 其ノ他諸作物 八、五三五円 計 四三、五二五円
 合計 一五三、三二五円 埋没崩壊 六一、〇反 一〇九、八〇〇円
 備考 最高水位ハ東中富村犬伏九郎左衛門前即チ破堤ノケ所ニテ原水ニ対照セシモノナリ
 大正元年十月二・三日 最高水位 一丈七尺

被害町村名 藍園村大字奥野村・徳命村・東中富村 汎濫面積 二百五十三丁
 備考 村ハ奥野村四歩・徳命村七歩・東中富村ニ於テハ三步通浸水也。今回ノ浸水ハ九月廿三日破堤ノ箇所ヨ
 リ浸水セシモノナリ。最高水位ハ、東中富村犬伏九郎左衛門前、即チ九月廿三日破堤ノ箇所ニ於テ、平水ニ対照
 セシモノナリ。降雨ハ九月廿九日午後ヨリ徐々降り嵩ミタリ。
 大正七年七月十一・十二日 七月十日午後四時より降雨あり 七月十二日午前十時より出水 風方向東南
 最高水位 二丈九尺 汎濫の面積 四百八十二町
 大正七年七月十二日吉野川出水浸水被害調

町	村	浸水反別	被害高	備考
藍園村大字	奥野	二、〇六九反	二三、五七〇円	被害ハ総テ吉野川
	徳命	一、一四八	一二、六四〇	本流ヨリノ被害ニ
	東中富	一、〇九二	一一、〇〇〇	シテ別宮川ヨリノ
	富吉	八九一	一一、七九〇	被害ナシ
合 計	五、二〇〇反	六〇、〇〇〇		

大正七年八月二十九日〜三十一日 吉野川流域水害

降雨 八月二十九日午後二時より八月三十日午前七時まで、風方向東北
 出水 初期八月三十日午前七時より三十一日午前三時 最高水位 一丈八尺
 汎濫面積流域内 六百四十町

河川概要 (統計材料調査上申) 大正七年十月十九日

幹川名支派川名	流域内耕作地面積	現住人口	三方里ニ対ス其川ニ船籍ヲ有スル現住人口有ナル舟隻數	汎濫面積	復旧費	耕作物損害額	諸損耗	
							反別	合 計
吉野川	一九六二・〇四八四、八四二	八四二	一五	二七四	二六、四	一七、四	四、四	計
派別宮川	二九四三、〇七二四、八四三	八四三	一一	四一一	六一、九三五	五二、一〇〇	四一、二九〇	計
								二二、二五

本表ハ大正元年九月二十二・二十三日大洪水ニヨルモノニシテ其後洪水ナシ随テ被害ナシ

予防施設 吉野川洪水対策として本町外関係町村が洪水予報連絡会を結成し、本部を吉野川工事事務所に置き、上流高知県元山外七カ所に水位観測所を設け増水状況を刻々無電通報し、事前に防除対策を講じて居る。

正月には急に火が消えたように消滅してしまった。

本町でも、徳命の三好市太郎の父佐市郎は、朝早く家から出てスタチの木の下に立つと、あら有難や勿体なや天照皇大神宮の剣先守が頭の上に落ちかかったので、夢中になって踊っていると、ぴらぴらと札が降ってくる。同所の三好長五郎は、隣家の徳原八百吉と神々参りの人々に粥を炊き出して進ぜようとして、新居須の渡に出張っていると、虚空にひらひら飛ぶものがある。これは不思議と眺めていると、これまた札が天降ったと云う事である。

四 災 害

災害の中には、ひでりによる旱害・暴風雨に伴う洪水の害・いなごの発生による虫害・疫病の流行・その他地震・火事等もあるが、火災を除く他は、総べて天災である。しかも江戸時代には、土木・治水も幼稚であり、用水の利用もほとんど人力による外なく、また病虫害の防除についても不十分なため、一度その害が及べば随分と甚大な損害を蒙り、人命に及ぶものが随分多かつた訳であつて、殊に封建治下に於ては救済は藩内に限られていたので、その復興にもまた相当の年月を要したのである。(第一編総説第四章氣候二異常と災害四七頁以下参照)。

慶長から慶応までの間の大きな災害は、徳島県災異誌によると次の通りになっている。

天正十年(一五八二)	洪水	慶長九年(一六〇四)	大地震・津浪
貞享四年(一六八七)	大水	元禄二年(一六八九)	勝浦川洪水
宝永四年(一七〇七)	大地震・津浪	享保九年(一七二四)	旱害
享保十年(一七二五)	旱害・蝗害	享保十一年(一七二六)	旱害・蝗害
享保十三年(一七二八)	暴風雨	享保十四年(一七二九)	秋 洪水
享保十六年(一七三一)	秋 大風雨	享保十七年(一七三二)	蝗害・飢饉

宝曆七年(一七五七)	風雨・洪水	安永三年(一七七四)	風雨・洪水
天明三年(一七八三)	飢饉	天明七年(一七八七)	長雨・洪水
文化元年(一八〇四)	不作	文化三年(一八〇六)	阿北旱害
文化十四年(一八一七)	風水害	文政八年(一八二五)	風水害
天保八年(一八三七)	洪水・飢饉	天保十四年(一八四三)	洪水
弘化四年(一八四七)	大風雨(盆の水)	嘉永二年(一八四九)	大風雨(阿房水)
安政元年(一八五四)	大地震	慶応二年(一八六六)	大風雨(寅の水)

藍園村志(未刊)には、安政元年の大地震について次のように出ている。

霜月四日の暮れ六ツ前から西南高越の方面から地鳴がすると思つと、程なく揺り出して、五日は最もはげしく震動数回に亘つたという。徳命の徳元嘉平翁の話によると、四日は西貞方に操芝居があつたので翁は見物にいらつたが、不意の事として芝居の中は大混雑、漸く逃れて徳命に帰り八幡神社の前にかかると、轟然大音響を發して一丈七尺の大御影石の鳥居は倒壊し、八幡宮を中央にして左右に並んだ牛頭天王・天神宮の三社は見る間に揺りこわされた。此の震動が数日続いている中に、貞方以東の人々は津浪を恐れて逃げ来り、地方の者達は藪の中に避難し、野宿をして疲れた眼を開いてみると、頭の上には霜が真白に降りていたとの事である。倒壊された鳥居は今も名残を留めているとのことである。三社が合祀せられたのは地震の結果であつて同年度のことであつたと云う。当時の被害は田畑の亀裂と噴水・家屋の倒壊等であり、噴水の高さは四尺以上に及んだとの事である。徳命大波止の北約三町の所に深い亀裂が長く残っていたさうであるが、数度の其後の洪水によって消失したとの事である。貧富を論ぜずこの時には飢餓に苦しんだとの事であるが、幸にして死者は無く脅威と不安を与えたに過ぎなかつたとの事である。